

第 24回 協力隊運営委員会議事録

(昭和55年 3月)

青年海外協力隊事務局



国際協力事業団	
受入 月日	'84. 9. 13
	000
	36
登録No.	14994
	JV

第 24 回 協 力 隊

議　事　要　録

1. 日 時 昭和 55 年 3 月 19 日 (水) 午後 6 時 30 分

2. 場 所 日本青年館・東洋軒 「牡丹の間」

3. 出 席 者

委 員： 衛藤瀬吉委員、末次一郎委員、内藤幸彦委員
(五十音順)

事業団： 有田総成、荒勝副総裁、橋理事、佐々木理事、
黒河内事務局長、松崎次長

4. 論　題 1. 隊員の諸活動について

2. その他

- 資 料
- 昭和 55 年協力隊業務年間スケジュール
 - 協力隊派遣取組締結状況
 - 募集・啓発活動の動向
 - 事業団職員となつてゐる協力隊員 O.B
 - O.B 隊員専門家派遣延数
 - インドシナ難民救援活動参加帰国隊員

別に、参考として「都道府県協力隊主管課長会議資料」

JICA LIBRARY



1018755[7]

(議事要録)

―― 有田総裁就任後初回の運営委員会であり、本委員会が、総裁の出席と主宰の下に審議を行うというルールに基いて冒頭に総裁から要旨次の挨拶があつた。

(総裁) 開会にあたりご挨拶をしたい。私は、O T O A 時代から間接ではあるが、海外協力の話に、また協力隊についても関心を持つてきた。青年海外協力隊は発足の頃は米国平和部隊の評判を契機として、日本でも同様のことをと考えて始まつたが、委員各位のご尽力もあつて今日まで成長をしてきた。最近は、派遣の人数もふえ、何よりも日本の若い世代が積極的に興味をもち、また現地では、受入国によく溶け込んでおり、批判的な言葉は余り聞かず、賛讃の辞が多い。

80年代は難しいが、これからが日本の生きる道を探る本番である。不確実な時代、見通し不透明と言われ、その点政治の責任は重いが、しかしその中にあつて確実にいえるのは、国際協力をもつとすすめてゆかねばならないということである。国際協力にはいろいろな形がある。無償資金協力、専門家の派遣、開発調査、社会開発等々さまざまであるが、今日強調されている「人づくり」協力、心と心のふれ合いという点で端的に成果を發揮しているのは協力隊であり、多面な国際協力の諸活動の中にあつて、一つの力、役割を果たしている。今後ともま

すます発展してほしいと思う。

ここにおられる末次委員は、私が若い時代からお付き合いしております心強く思つてゐる。これからも委員各位のご意見を体し、尊重して、協力隊を日本の国際協力の中で一層の成果があげ得るように、かつ日本の若い人たちの生きざまとして、もり立ててゆきたい。そのために各位の卒直なご意見をうかがいたい。

―――――― 次いで黒河内事務局長が提出資料に沿つて協力隊事業の現況について説明。特記すべき要点次の通り。

(事務局長) 55年度の業務年間スケジュールは、3次隊、4次隊の派遣前訓練が年末年始に中断される点の改善等を考慮して従来の年間スケジュールに調整を加えた。

募集・啓発活動の動向に関しては、特に資料の右側、即ち、55年度1・2次隊の募集に係る最近の状況、傾向をご覧頂きたい。全国紙に占める朝日新聞の効果、友人、知人、隊員からのいわゆる口こみの大いさが注目され、さらに「アサンテ・サーナ」の上映運動とそれを受けついだ「育てる会」の今後に負うところが大きいと痛感する。

(末次委員) 3月17日にNHKテレビに放映された「総理と語る」の青年代表の一人として帰国隊員が出た。協力隊の啓発によりチャンスと期待したが、4年間活動してきたのに

上手に体験を話すことができず从此にいつて非常に惜しいと思つた。代表で出る〇B隊員は、コーチをしなくても話ができるのでなければ困る。

(総裁) (資料中のJICA内の〇B隊員数に関連して)事業団職員に〇B隊員を採用することもさることながら大きな企業の中でどういう帰国隊員がいかに就業しているかについても報告してしかるべきだ。大企業は世界的規模で活動しているのであって、現地語を知つてゐる協力隊員〇Bは、大きな強味だ。住友化学工学会長の長谷川周重氏と会つた際、積極的にもつと欲しいと言つていた。自分もそのために努力したい。理事各位も企業の人たちに会う際に吹聴してほしい。

(内藤委員) (資料中の難民救援活動参加の帰国隊員一覧表に関連して)協力隊〇Bがマスコミに騒がれて脚光を浴びているように感するが、それは、〇Bとして本意ではない。地方でコッコツと難民の子供たちの世話を一しょに遊んでやつたり、見えないところで努力しているのが本来の姿であることを特に強調しておきたい。

また難民救援の声が上がり始めた当時はラオス〇Bが主だつたが、次第に隊員派遣国に万遍なく、どこの国〇Bということなく、広がりを見てきた。3月15.

16両日〇B会の全国代議員会があり各県〇B会の会長や代表が参集した機会にもつと大勢の〇Bに救援を呼び

かけようと訴えた。

(総成) O.Bといえども仕事に就いている人たちであるから雇用者の立場も考えて、難民救援にO.Bがぜひ行かねばならないということになつてはいけない。無理をすべきではない。

(事務局長) 充分配慮してやつてきているが、今後とも配慮したい。なお、JICA派遣の医療班3チームとその総括のコーディネーターがいずれも交替の時期であり、近く事務局職員も含む交替者が赴任すべく必要な事項をすすめている。

――――――現況の説明と関連する意見交換を一区切りとして、末次委員より同委員の提唱により、運営委員会の賛同を得てすすめている、特別研究委員会の状況について発言。

(末次委員) 55年度の予算要求に取組むところから、協力隊事業の長期展望を考えながら事業をすすめてゆく必要ありと提唱して特別研究委員会が賛成したのは10月であつた。以来6回に亘つて論議を重ね、目下整理中であるが、私はこの3月末から3週間ほど海外に出るのでその後のとりまとめを経て、5月に入つて報告できるようにと考えている。56年度の予算要求に間に合うよう問題提起したい。派遣要請の動きからみて7年で現状の2倍程度になるとの目途を立て、対応能力、充足度を考慮して取組

み方、即ち募集、選考、訓練等の事業の方向示唆をした
い。関連して隊員の待遇、事務局の体制、在外機能等に
ついても問題点、改善点をあげる考え方である。

(橋 理事) 予算に関連づけることは重要だ。国際協力総合研修所の構想もあるが、いかに効果的に予算が立てられるか、なかなか難しい。ただ今うかがつた提言の時期はタイミングとしてよい。

(荒勝副総裁) 新しく筑波に研修センターができて、途上国の全人種が集まることとなるが、早く途上国人に接するという趣旨で、そこでしばらく実地にふれたり慣れたりするような試みはどうか。

(佐々木理事) すでに名古屋のセンターと駒ヶ根訓練所との間で、相互乗り入れとでもいうべき交流を実行して効果をあげている。

(末次委員) 米国の平和部隊は、80名が例えばタイ国にゆくと決まるとき、訓練時点からチユラリンコン大学と連係して、大学から専門家が訓練に参画する。部隊員に黒人の子供たちを学校にキッチンと行かせる運動(Head Start)に組入れ、子供の遊び相手もさせながら専門家が見ていて、タイの子供ならばこうする、と助言示唆する方法だ。訓練は、とかく画一的になりがちであるが、考え方を改

め、管理、運営は大変と思うが、訓練の多様化を考えるべきだ。駒ヶ根訓練所においても現地風のロッジで現地風の生活をやつてみたり、"エサ"づくり、自炊その他身のまわりをキッチンとする習慣づくりも必要ではないか。青年運動時代には雑炊たきをやつたが工夫によつて、うまくなるものである。「少年自然の家」では飯盒をつかつてやつている。

(内藤委員) 隊員の中には結構コマメな人たちもいる。山岳部に入つていたという人々は、実によくやる。

(内藤委員) 総裁にお願いしたい。〇日と今後もぜひいろいろな機会に会つてほしい。特に地方に行かれた際には、その地方にいる〇日と会う機会をつくつて頂きたい。

(総裁) 深んで会いたい。今JICOで会議中の医療協力のリーダーと会つて、話を聞いたがなかなか面白い。会うことは楽しみでもある。

午後8時30分会議を終了。次回は、末次委員が帰国されて以後、改めて日程等相談の上諸般決定することとして散会。

